

わたしの好きな妹の笑顔

中 二一

私には、三歳年下の妹がいます。妹とは、たまにけんかもしますが、にっこり笑う笑顔を見るとすぐに仲直りしたくなるほど、私は妹の笑顔が好きです。

妹は四歳の時に眼科で、右目が弱視と診断されました。弱視とは視力が弱い目のことをいいます。妹の左の目は視力がとてもよいため、左右のバランスが違いすぎ、見づらく、このまま大人になると生活するのも大変になってしまふと聞きました。妹を見ると、何かを見る時、顔全体を右に傾けていました。よく見える左の目で見るうちにくせになっていたのです。階段を降りる時に手すりを持ち、時間をかけて降りていることを思い出しました。私は、

「遅いよ。早くしてよ。」

と、急かしたことがあります。見え方が違って怖かったのかと思うと、気づいてあげられな

かった自分、優しく手を貸してあげられなかった自分が嫌になりました。そして、医師から、「もつと小さい時から治療をスタートしていれば……。」と聞いた母も後悔し、妹に隠れて泣いていました。

弱視の治療は、健全な目をアイパッチの大きなバンソウコウで隠し、弱視の目を使って訓練をする方法です。視力が弱すぎて危ないので、度の入った眼鏡を使用します。

すぐに妹は、片目の眼鏡での生活が始まりました。保育所に通う頃は、動きづらく疲れやすかったようですが、小学校に入学する頃には、だんだんと慣れてきたようでした。私は小学校四年生になり、心配していた通り、妹の姿に周囲の子たちはびっくりしていました。私が、周りの様子を気にしながら妹を見ると、妹は笑顔で手を振ってきました。しかし、手を挙げることはできませんでした。声を掛けることができずに帰ってしまったことを、今でも思い出します。

次の日から、妹はクラスの子たちから、

「気持ち悪い。」

「普通の眼鏡と違う。」

「変。」

と言われるようになりました。私は憤りを感じ、「やめて。私の妹をいじめないで。」

と、明日、みんなに言うことを妹に伝えましたが、

「大丈夫。目が良くなるためだから。」

と妹は笑って言いました。

けれども、妹に対する嫌がらせは続きませんでした。学校の机の上に妹のクーパーが全部折られていたり、物を捨てられたりすることもありました。妹は、帰ってくる母に抱きついて泣くことも多くなり、笑顔がだんだん見られなくなってきました。母が、

「眼鏡をしなくてもいい。」

と伝えましたが、妹は、

「する。負けない。目が良くなりたいたいから。」

と言いました。私は妹を見て涙が出ました。私の涙は、妹のことをかわいそうと思う涙ではありません。妹に対して頑張れと思う心が、じん

じんする強い涙だったことを今でもよく覚えています。

その後、学校の先生の指導で物がいたずらされることはなくなりましたが、言葉による嫌がらせは三年間続きました。妹は、

「目を治しているから。」

と、私が小学校を卒業した後も毎日言い続けました。そして、ついに学校で何も言われなくなりました。妹もよく笑うようになり、今では片目眼鏡をかけた笑顔も私は好きです。

妹が普通じゃないと、友達に言われた時、普通って何だろうと、考えました。誰が決めた普通なのでしょう。一人一人に個性があつていと私は思いました。いじめのことを、どこか他人事に思っていた私が、人権に初めてふれた瞬間でした。人権はみんながもっていて、守っていかなければならないものです。そして、人が幸せに生きていくのに必要な権利です。

暴力は体が傷つくけれど、言葉の暴力は心が傷つき、心の傷は簡単に治すことができません。人に見せることができないから、周囲の人にも

わかりません。自分でも気がつかないうちに、誰かを言葉で傷つけてしまうこともあるかもしれません。だから、私はいつも相手の気持ちを考えるように努力していこうと思います。

また、目の前の人が傷ついていたら、自分から声を掛け、優しく接することができる大人になりたいです。そして、誰からも頼られる存在になりたいです。

今まで、自分が変わりたいと思ったことはありませんでした。しかし、目標に向かっていく今の自分が好きです。こうなれたのも、強い気持ちをもった笑顔のかわいい妹がいてくれたからです。

